

Death Educationに 関する研究

(分担研究：小児の死に関する宗教的側面)

井原彰一、鈴木恵三

要約：小児が不治の病に罹り、死に直面しながら生きて行かなければならない状況に置かれるとき、家族とのかかわりは極めて大切である。その場合、親たちがどのような死生観をもっているかによって、こどもとのかかわりの内容は異なったものとなってくる。ここでは、親たちの死生観を把握するために、死をめぐる日本人の宗教的感性と、西洋人の死生観のもととなっている復活について考察してみたい。日本においては様々な宗教があり、それ死に対する基本的な理解も多様なものである。死に関して日本人の置かれている状況は複雑なものである。

見出し語：死生観、宗教的感性、死の定義、遺体、復活

キューブラー・ロスは、子供の死のイメージの形成に関して次のように言っている。「われわれ人間は、恐怖は自然には二つしか生まれながらそなわっていない。転ぶことへの恐怖、そして高音への恐怖がそれである。その他の恐怖はすべて、恐れる大人たちから子供へ伝達されたものである。．．．．．子供は三、四歳に達すると隔離（分離ともいう）への恐怖に加えて、断節（手足その他の身体の部分を切断されること）への恐怖がでてくる。これは子供たちがその生活環境で死のかたちを見るようになると起こる。自動車に轢かれたネコとかイヌとかを見ると、死というものがわずたずたに切り裂かれた恐ろしい身体と結びつけられて観念される。あるいは子供はネコが小鳥を食いちぎるのを見るかもしれない。」（死ぬ瞬間の子供たち、p. 90）

確かに、子供たちが死のイメージを形成するにあたり、親たちの影響は極めて大きいとすることができる。そして大人たちの死のイメージは、かれらが住んでいる宗教的、文化的な背景に依拠しているのである。それ故、ここでは日本人が死に

関してどのような宗教的感性をもっているのかを考察してみたい。近年、脳死な臓器移植の問題を契機にして、新しい死の概念が導入されつつある。しかしながら、日本では臓器移植は殆ど進まず、その一因として宗教的、文化的な抵抗が考えられる。そこにあるのは、臓器移植が頻繁に行われる欧米の死生感とは異なった日本人の固有な宗教的感性である。臓器移植の問題を考慮しながら、日本人の固有な死の理解について考えてみる。

1. 死に対する日本人の感性

古来、人間にとって死は時間的に単なる一点で捉えられるものではなく、様々なプロセスを通して確認され、受け入れられていた。そこでは病で病床に伏し、家族との別れを済ませ、臨終の時を迎え、呼吸や心臓が止まり、柩の中に安置され、黙禱が捧げられ、葬儀が行われ、荼毘に付され、一周忌、三周忌を迎え、先祖の霊として祭られるという長いプロセスが必要とされるのである。日本人は神道や仏教の伝統に根ざして、そうした死に対する自然な宗教的感性を培ってきた。

日本人にとって、命は心臓に宿っていると考えられていた。仏教では「命根」は心臓だけにあるように思われていたし、神道では心臓が動いている間は、その肉体に靈魂が宿っていると考えられている。また、「こころ」と心臓を同じ「心」という字によって表していることから見ても、「たましい」が心臓に宿っていると考えていることが分かるのである。

1984年に提出された「死の定義に関するスウェーデン委員会報告書」(The concept of Death. Report of the Swedish Committee on Defining Death. The Swedish Ministry of Health and Social Affaires, 1984)によれば、仏教、神道では臓器移植をめぐる死についての宗教上の規定はないとなっている。これは日本人が上記のような宗教的感性で死を受け止めて、教義的に厳密な理論なしに生活してきたことを物語っている。

ところが近代医学の技術的な発展に伴い、臓器移植が可能になるにつれて、それを実現するためには脳死という新しい死の概念を導入しなければならなくなったのである。それは何年にも及ぶプロセスを背景にした死から、分の単位でしか続かない「脳幹を含む全脳の不可逆的な機能喪失の状態」という点としての死をクローズアップさせるような死への変化であり、また死の中心が心臓から脳へ移行するという変化である。

このような変化を前にして、多くの日本人が戸惑いを感じるのは極めて当然である。何故ならば、その変化は、人間的な絆の連続性の上に成り立つ死から、機械としての肉体の滅びを浮き彫りにする死への変化、そして心臓(こころ)への暖かい思いから、抽象的で冷やかな概念の操作を感じさせる脳への変化という二つの重大な意味を含んでいるからである。

日本の文化にとって義理や人情が果たす役割は大きいのであるが、そこでは「情」が土台になっている。ガンの告知などを含む死の場面においても、日本人は「情」をもとに動く。復活を前提にした終末的なヴィジョンに基づいて、「真理」を重視するキリスト教とはかなり異なっている。日本ではクリスマスに教会の礼拝に参加する人たちが少なくないが、復活祭には殆ど関心を示さない

。これは日本人が自分たちの死生観とキリスト教のそれとを教義的に比較することなく、無意識的に自分たちの宗教的感性にあわないものに対して抵抗していると考えられるであろう。

2. 遺体に対する日本人の感性。

欧米を中心としたキリスト教国においては勿論のこと、同じ仏教国でもタイや台湾などでは脳死が認められ、臓器移植もおこなわれているが、日本では脳死臨調が臓器移植にゴーサインを出したあと一年以上たっても一例もおこなわれていない。臓器移植法という法的な問題、ネットワーク作りという社会的な問題、医療費という経済的な問題など様々な問題をかかえているわけであるが、それと同時に日本人の体、遺体、遺骨、墓に対する独特の感性が臓器移植が進まない重要な原因となっていると思われる。

欧米ではデカルトの心身二元論の影響が強く認められるが、日本においては心身一如の世界、心と身体が同時であるような世界が基盤となっている。また、体を傷つけないことが親孝行の始まりであるといった儒教的な影響も依然として残っている。神道においては、魂には生霊と死霊があり、死霊は死んだ後の魂のことであり、死後に魂は身体を離れるが、暫くは身体の近くにいますと考えられている。このような死生観から日本人は遺体に対して独特な感性をもっている。飛行機の事故などの場合、日本人は欧米人と比べて遺体の収容に非常に熱心になるが、それは日本人の遺体を尊重する精神の現れと考えることができる。また遺体を運ぶときに廊下の角にぶつけてしまったときなど、「ごめんなさい」と言いたくなる心情が湧いてくるし、遺体を解剖するときには、「痛いだろうな」と言って涙を流す家族は少なくないのである。

遺体を重視することは、遺骨を大切にすることに繋がってゆくのである。インドの仏教には、信者の遺骨を墓にまつて礼拝する習慣はない。しかし、日本人は遺骨を墓に奉って祈念する儀式を尊重する。それは物質としての骨を礼拝するのではなく、遺骨に靈的な威力を認めているからであり、死者の魂は遺骨とともにいると考えているか

らである。戦没者の遺骨収集に関して、遺骨を「柱」という数称で数えることも、遺骨に宗教的な神聖性を認めていることの現れである。

3. 臓器移植に対する日本人の感性。

臓器移植に関するアンケートは日本人の死生観を伺い知るための一つの良い機会である。1991年12月に仏教の僧侶たちを対象にして実施されたアンケートの結果を参照してみたい。「臓器移植の根本理念をあなたはどのように考えますか」という設問に対して、①思いやり、布施の行として肯定的にとる者は7%、②状況の違いによって、肯定的にも否定的にも考えられるとする者は65%、③概して否定的に考えたいとする者は27%、④良く分からないとする者は1%という回答であった。

「脳死者からの臓器移植に関して、宗教者から幾つかの見解が提示されています。あなたの考え方はどの見解に近いと思いますか」という設問に対して、①臓器移植は慈悲行に通じる行為とする者は20%、②臓器移植は人間の欲望や執着心の現れであるとする者は48%、③臓器移植は西歐的合理主義から生まれたリサイクル（資源の再利用）とする者は26%、④臓器移植は人肉を食べるという人間の禁忌（タブー）に触れる行為とする者は6%という回答であった。

これ以外にも幾つかの設問があるのであるが、総じて言えることは、臓器移植に対してかなり否定的な見解が多いということである。臓器移植は殺人であるとする者が15%もいた。仏教において、推子天皇の時代に作られた玉虫厨子には菩提薩垂太子の投身飢虎の絵にしめされるように、自分の命を与えることを慈悲の現れとして捉える伝統があるのであるが、僧侶のアンケートの見解はかなり異なったものになっている。

より高い価値のあるもの（他者の命を生かすこと）のために、あるもの（脳死状態になった人から心臓を取り出し、死に対する自然的な感性）を犠牲にすることは、人間の倫理的な行為として優れたものであるという認識よりも、体や遺体や心に対する自然な情の方が優位に立っていることをよく示している。

小児のターミナル・ケアにかかわるとき、このような日本人の固有な死生感を理解しておくことは非常に大切であると思われる。次に、欧米人の死生感の中心になっているキリスト教の復活について考察してみたい。紙数の制約のため、ここではシェーマと聖書の典拠を示すにとどめておくこととする。

『復活』——新しい次元への開きとしての死

A. 現象から本質へ

a. 見えるものではなく、見えないもの

「私たちは見えるものではなく、見えないものに眼を注ぎます。見えるものは過去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」（コリント後：4,18）

b. 「外なる人」は衰え、「内なる人」は成長する

「私たちの外なる人は衰えていくとしても、私たちの内なる人は、日々新たにされてゆきます。私たちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほどの重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。」（コリント後：4,16-17）

c. 新しい命

「私たちはその死に与かるために、洗礼によってキリストとともに葬られたのです。それはキリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちもまた、新しい命に歩むためです。」（ロマ：6,4）

B. 希望のよりどころであるキリスト

a. キリストに希望をかける

「私たちが、あらかじめ定められ、約束されたものの相続者として選ばれたのも、このキリストに結ばれることによります。これは、以前からキリストに希望をおいた私たちが、神の栄光を讃えるようになるためでした。」（エフェソ：1,11-12）

b. キリストの苦しみと死

「イエスは悲嘆にくれ、もだえ始め、彼らに『私の魂は悲しみの余り、死ぬほどである。ここにいて、目を覚ましていなさい』と仰せになった。」（マルコ：14,33-34）

c. 罪と死、救いと命

「キリストがあなた方のうちにおられるならば、体は罪の故に死ぬことになっても、受けた救いの義の故に、聖霊はあなた方の命となっています。」(ロマ:8,10)

d. 神の招きに伴う希望

「そして、あなた方の心の目が照らされて、神の招きに伴う希望がどのようなものであるか、聖なる人々が相続する約束されたものの栄光が、どれほど豊かであるか、また、神の力強い威力ある働きかけに従って、信仰を持つ私たちに及ぼされる力が、どれほど偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるように祈っています」(エフェ:1,18-19)

e. 約束された現実と栄光

①神を見る

「私たちは本当に神の子ですが、どうなるかはまだ明らかになっていません。しかし、それが明らかになるとき、私たちは神に似た者となることを知っています。なぜなら、神をありのままに見るからです。」(1ヨハネ:3,2)

②将来の栄光

「現在の苦しみは、私たちに現れるはずの栄光と比べると、取るに足りないと思えます。．．．その被造物も、やがて腐敗への隷属から自由にされて、神の子供の栄光の自由に与かるのです。」(ロマ:8,18-21)

C. 復活のよりどころであるキリスト

a. 復活そのものであるキリスト

「私は復活であり、命である。私を信じる人は、たとえ死んでも生きる。」(ヨハネ:11,25)

b. 信仰者の復活

「死者が復活するときは、めとることも、とつぐこともなく、天の使いたちのようになる。」(マルコ:12,25)

眠っている者よ、起きなさい、死者の中から復活しなさい。キリストはあなたを輝かせます。」(エフェソ:5,14)

D. 苦しみを生きる

a. 苦しみと慰め

「神はあらゆる苦難に際して、私たちを慰めて下さるので、私たちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。キリストの苦しみが満ちあふれて私たちにも及んでいるのと同じように、私たちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。」(コリ後:1,4-5)

b. 死からの解放

「キリストと共に死んだのなら、また、キリストと共に生きることになると私たちは信じます。死者のうちから復活させられたキリストは、もはや死ぬことがないと、私たちは知っています。死はもはやキリストを支配していません。」(ロマ:6,8-9)

(ロマ:6,8-9)

「私を信じる者は、たとえ死んでも生きる。生きていて、私を信じる者は、すべて永遠に死ぬことがない。」(ヨハネ:11,25-26)

c. 死を望む

「実に、私にとって生きるということはキリストであり、死ぬことはまさにもうけものです。しかし、もしこの肉体で生き長らえたとすれば、それは私にとって実りある働きを意味します。ですから、どちらを選ぶべきとも言うことができません。この二つのことの板ばさみの状態です。私としては、この世を去ってキリストと共にありたいと、切に望んでいます。その方が、はるかに良いからです。しかし、あなたがたのためには、私がこの肉体に留まることがもっと必要です。」(フィリップ:1,21-24)

d. キリストの教会の出来事——共感体験

「私たちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、私たちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたが私たちの苦しみと同じ苦しみに絶えることができるのです。あなたがたについて私たちが抱いている希望は揺るぎません。すげなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、私たちは知っているからです。」(コリ後:1,6-7)

e. 主のために生き、主のために死ぬ

「私たちの中で、だれ一人として自分のために生きる者はなく、また自分のために死ぬ者もあり

ません。私たちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死にます。生きるにしろ、死ぬにしろ、私たちは主のものなのです。死んだ人にも生きている人にも主となるためにこそ、キリストは死に、そして生き返られたのです。」（ロマ：14,7-9）

f. 究極の自己実現

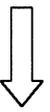
「私は生きているが、もはや私ではなく、キリストが私の中に生きておられる。」（ガラテヤ：2,20）

信仰者にとって、死という人生における重要なテーマは、キリストと共に死に、キリストと共に生きているという次元に存在するということと不可分の関係にある。究極的な人生の目的は、キリストへの委託によって、一度自己否定を通り、生きているのは私ではなく、キリストが私の中に生きておられるというキリスト中心の人格な完成を目指すことにある。そこでは、神の御旨が何よりも求められるのである。死の問題と人間の救い、人格の完成、信仰の世界、究極的な自己実現はそれぞれが相互に密接な関係をもっているのである。死の中に潜んでいる深い意味を見極めていく洞察力が必要であり、それは日頃の生き方の中で磨いて行く以外に道はないのである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:小児が不治の病に罹り、死に直面しながら生きて行かなければならない状況に置かれるとき、家族とのかかわりは極めて大切である。その場合、親たちがどのような死生観をもっているかによって、こどもとのかかわりの内容は異なったものとなってくる。ここでは、親たちの死生観を把握するために、死をめぐる日本人の宗教的感性と、西洋人の死生観のもととなっている復活について考察してみたい。日本においては様々な宗教があり、それ死に対する基本的な理解も多様なものである。死に関して日本人の置かれている状況は複雑なものである。